

命の尊さ

先日、庭木の枝にセミの抜け殻を見つけました。

セミの幼虫は地中で3年から17年程過ごした後、地上に出て羽化します。この抜け殻の主は、わが家の地中に長年雌伏し、この夏いよいよ飛び立ったのでしよう。1つの命が長年にわたって地中で育まれていたのかと思えば、感動とともに、命あるものへの畏敬の念がわいてきます。

さて、世界の国の中にはセミが珍しく、鳴き声を知らない人も多いようです。だからでしょうか、イソップ物語の「アリとセミ」も、国が変われば「アリとキリギリス」となっています。

日本の夏に欠かせないせみ時雨。今年は静かで、各地でも遅れ気味とか。この夏も、今を限りに生きているセミ、今を限りと鳴いているセミがいます。それは命を受け継ぎ、今の時を生きるセミの務めでもあるかのようです。

地中での長い期間に比べる

と、成虫になったセミの寿命は数日から2週間程度と実にはかないものです。

わが家の庭で羽化したセミも、もはや寿命を終えているかもしれません。しかし、短い時であっても渾身の鳴き声でこの夏を精いっぱい生き抜き、次の世代へと確実に命のバトンを受け継いでいます。

盆を過ぎるころには、細るセミの声に替わり、秋の虫たちが命の限り歌い始めます。鈴を一振りしたような澄んだ音色を放つスズムシ。最近ではめつきり減ってきましたが、卵をふ化させては学校や保育所などに贈り続ける「スズムシおじさん」がいたことを思い出します。

子どもたちのいない放課後の部屋に響きわたるスズムシ声に、命の尊さを思う8月のころです。



羽化したセミ

指宿市長 豊留悦男